



しまつて、国内外を問わず旅行に出かけたリ・アートやゲームなどのイベント企画をかけていた。だくと、海外にもできるだけ出かけるようにしています。

海外では招待されたイベントに参加するだけでなく、できるだけ時間を作って近くの観光地などにも足を伸ばすように心がけています。去年は、フランス西海岸の世界遺産モン・サンミッシェルを初めて訪れました。素晴らしい場所でした。やはり映像や耳にする情報だけで行った気分、知った気持ちになてはいけな、と改めて感じました。壁の色、飛びかモメ、少年の横顔、土産物屋の喧騒などその場で身体に感じるリアリティー、空気とか匂いとか手触りとか、その場所に足を運ばないとわからない土地の磁力、底力みたいなものを感じてきました。自分の足の下にその土地をしっかりと踏みしめて、自分の目で見る耳で聞いて鼻で嗅いで手で触れて、五感を使うことの大切さを再確認しました。



描き続けることの幸福。

変わらない日常を送っています。「今、どんなことをしているんですか？」と尋ねられたら「そう、絵を描いています」とお答えするしかない日々です。もちろん以前に比較すれば依頼されてテーマを決められて描く作品の数は少しずつ減り、相対的にオリジナル作品として自分でテーマを決めて自由に描く作品が増えていますが、それでも「絵を描くことに多くの時間を割いている」絵が中心の日常は昔とほとんど変わりはありません。

そうですね、締め切りのある作品を描く枚数が減って、自分なりに自由が効く時間が増えて生活がどう変化するかとも思ったんですけど、やはり自分が一番好きなことに変化はなく、絵を描いていました。二番目に多い時間はなんだろうと振り返ってみると、次にどんな絵を描こうかと絵のテーマや設定を考えること、絵を描くために頭の中を整理すること、時間に時間を使っていますね。夢中に描く絵はどんなふうに描こうかと考えている時間、この時間が僕にとって一番楽しい時間なのかもしれません。もうずっとこのままでしょうね、さつと笑。

きつかけがないと外出もせず、ずっとアトリエで絵を描き続けて



■アトリエでは常に音楽を聴きながら制作している。息抜きには愛器(Gibson J45)でギターを奏でることも。



雲を描けば、雲を覚える。

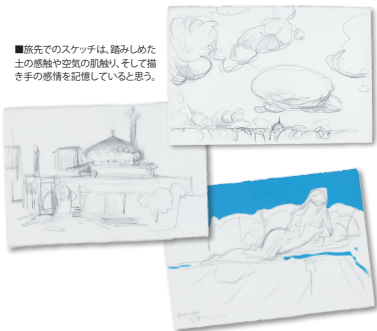
旅先では気が向くとスケッチをします。パリでは公園に集まる恋人たち、近郊都市・バイの周囲に広がる景、たる砂漠、そして突然現れる歴史ある建物、昨年のモン・サンミッシェルなど、アトリエから出て変わらぬに絵を描いているんです。いや、海外旅行は本格的なスケッチブックなど、道の具も持参するんです。そう、いつたものは使わなくて、そのままスケッチブックの中に眠っていることが多いです。むしろ、何気なく立ち寄った土産物屋、さながら自にいた小さなスケッチブックに、たまたま手元にあるボールペンで描いています。なにも描かなくても、シートの裏にたり包裏紙にたり、カフのコースターに、僕にとってはスケッチブックにありません。

スケッチには、ない、きれいな「おもしろい」という印象を、描線という自分にとって「再現しやうい」自だけの『集』で、そして、その感覚です。目の前を通り過ぎていく瞬間のリアリティーを心に繋ぎ止めておく、そのために、本の縁で、留める、そんな感じ、すていねいに描く時間もな



■モン・サンミッシェルの土産物店で購入したスケッチブック。描いたスケッチとともに、それ自身が旅の記念にもなっている。

で雲をスケッチしたからといって、描いた雲が寸分違わず記憶に残るといってはいけません。建物や風景を描き、その影を描いたからといって、それがうわけでもありません。ただ、浮かぶ雲の輪郭線、その線を一本押さえることにより、自分の中にある雲のイメージがより固まってくる、雲を表現する経験値が上がる、引き出しが増える、と申しています。現場に自ら足を運んで、実際に自分の目で見て、感じて、本の線を引く、記憶は身体の中に残っている、と思っています。そして、その雲の感触、リアリティーは必ずこれに描く絵にフィードバックされていく、備えています。



■旅先でのスケッチは、踏みしめた土の感触や空気の質感、そして描き手の感情を記憶していると思う。

